

# 医心 伝心

## 平成26年スギ花粉について

県医理事 河合 晃充

近年、国民病とも呼ばれる花粉症ですが、アレルギー性鼻炎は1960年後半から増加が見られるようになりました。1963年にはスギ花粉症が報告され、1980年代ごろより花粉症増加が社会問題化しています。スギ花粉症の有病率は1998年には16.2%であったものが2008年には26.5%と増加しています。さらにその後の調査で、スギ花粉症有病率が50%を超える都道府県があるなど増加の一途を辿っています。富山県では飛散花粉量が多くないこともあり、そこまで有病率が高くはありませんが、増加傾向であることには変わりありません。アレルギー性鼻炎の問題点は、その有病率の高さに加え、くしゃみ・鼻水・鼻づまり・目のかゆみなどの症状により集中力の低下・睡眠障害をきたし、結果として労働作業効率に著しい悪影響を与え、その経済的損失は他のどの疾患よりも高いという報告があります。このため、厚労省・環境省など国を挙げての花粉症対策が1990年代から始められています。

それに伴い治療法も進んできました。従来使用されてきた抗ヒスタミン剤に加え、各種の内服薬が開発されました。また、点鼻薬も開発されており、これらの薬剤をいかに使い分けるかが重要となってきました。予防的投与とも呼ばれていた初期治療は、花粉飛散予測日の1週間前、または少しでも症状が現れた時点で内服を始めることで十分効果が得られることが解ってきており、点鼻に

よる初期治療も可能性が期待されています。また、従来減感作療法とも呼ばれ、皮下注射により行われてきたアレルゲン免疫療法は、本年の夏頃にはスギ花粉症に対する舌下免疫療法が保険適応される予定で、今後期待される治療法です。手術治療もレーザーなどを使用した下鼻甲介手術に加え、内視鏡を使った粘膜下骨切り術や後鼻神経切断術など選択肢も増えてきています。

さて、平成26年のスギ花粉飛散量ですが、近年の平均値よりやや少ない2500個程度と平成25年の50%程度となる予想がされています。ただし、ある程度以上の花粉量があれば症状は出現するため、油断はできません。初期治療を適切に行うことが必要です。

県医師会としても、できるだけリアルタイムに県内各地のスギ花粉飛散状況を会員や県民の皆様にご提供することで、予防・治療にお役立てできるように検討しています。ご協力の程よろしく申し上げます。